

# モード Mode Mode は語る

中野 香織

ファッションブランドの回顧展が、相次ぎ有名美術館でおこなわれている。パリ装飾芸術美術館では、ディオールが約3000平方メートルのスペースで創業70周年の回顧展を開催している。同じくパリのブルデル美術館では、「バレンシアガ、黒の作品展」を開催中。ロンドンのビクトリア&アルバート美術館でも「バレンシアガ：ファッションを形づくる」が行われ（来年2月18日まで開催）、私も訪ねたが多くの来訪者で盛り上がっていた。

ファッションは芸術になりうるか？この問題は昔から論じられており、少なくともスペイン生まれのクリストバル・バレンシアガ（1895～1972）は、自分

## バレンシアガ展

# 芸術の要素 兼ね備えた服

の仕事をおのづかのように捉えていた。「クチュリエはデザインにおいて建築家でなければならない。形については彫刻家であり、色に関しては画家であり、調和においては音楽家、そして節制においては哲学者でなくてはならない」

思えばこのような要素をすべて兼ね備えたときに、ファッションは時を超えて私たちの感覚に刺激を与え、思考を挑発し、行動を促してくれる。そんな力をもつときのファッションは、鑑賞者に対し芸術と似た働きをすることがある。

ところで、バレンシアガにせよディオールにせよ、建築・彫刻という要素が強くなればなるほど、ドレスがマネキンな



バレンシアガは服地を用いてあらゆる奇抜な形の可能性に挑戦している

しでもそのまま形を保っている。2人とも男性だが、構造物の中に女性の身体を入れてください、というドレスを作る。

女性のココ・シャネルと比較すると違いがわかりやすい。彼女の作品はマネキンなしでは展示できない。生身の女性が着て、動いてこそ本領が発揮される。シャネルが芸術家扱いされることを嫌い、「私はあくまでドレスメーカー」と主張したことには、機能美を追求した彼女なりの矜持（きょうじ）があった。

服としての芸術性と、人がそれを着たときの機能美は、ほぼ反比例する。そんな特殊性があるから、ファッションはやすやすとは芸術には組み込まれないし、抽象的な議論もなかなか収束しないのである。そんなことまで考えさせてくれる「アートな」ファッション展が、さらに増えることを願いつつ。（服飾史家）